

東京大学
東京工業大学
東京藝術大学

三大学卒業設計 合同講評会

三大学卒業設計合同講評会は、各大学から選抜された作品を集めて、各大学教授・准教授と非常勤講師を審査員として行う卒業設計の公開講評会です。卒業制作を通して建築・都市の未来について議論し、これからについて考えるきっかけとなることを目指します。

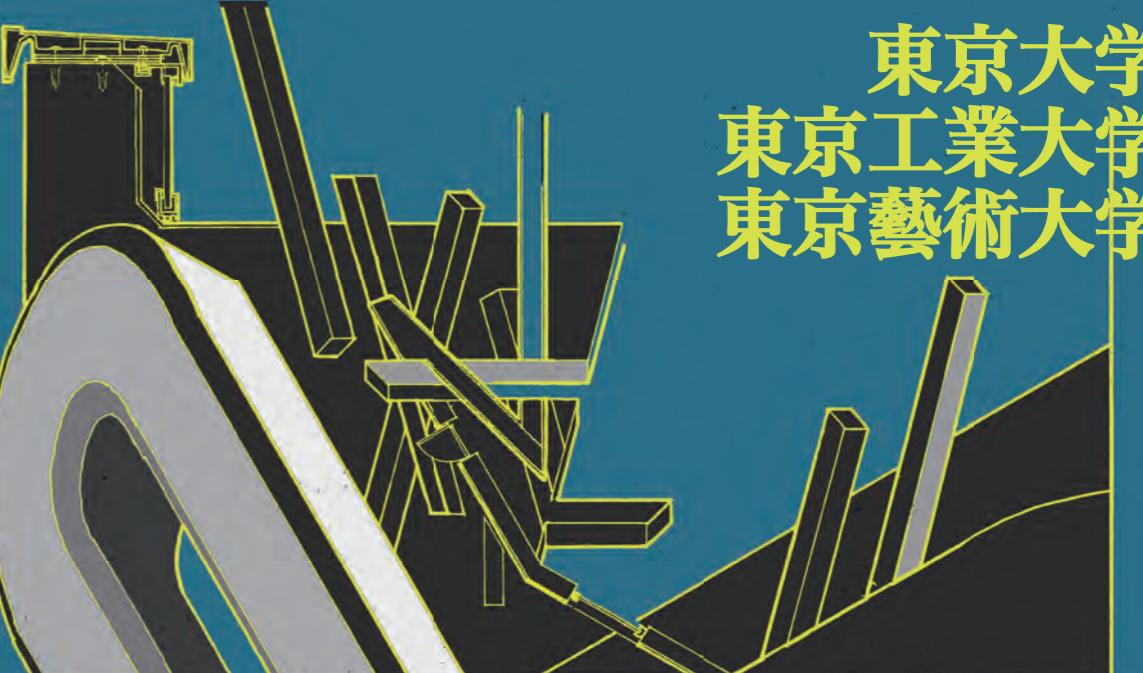
Three Universities Diploma Design Review 2019 is a educational event in Japan. Architectural education in Tokyo will be discussed though reviewing diploma works.

東京大学
工学部 1号館
2階製図室
東京都文京区本郷 7-3-1
Drafting room,
Engineering Building
#1-2F,The University of Tokyo
(7-3-1 Hongo,Bunkyo-ku,Tokyo)

ゲストクリティイーク
guest critics
隈研吾 教授
加藤道夫 教授
奥山信一 教授
石田 建太朗 特任准教授
トム・ヘネガン 教授
中山英之 准教授
(順不同)

2019.03.10(日)

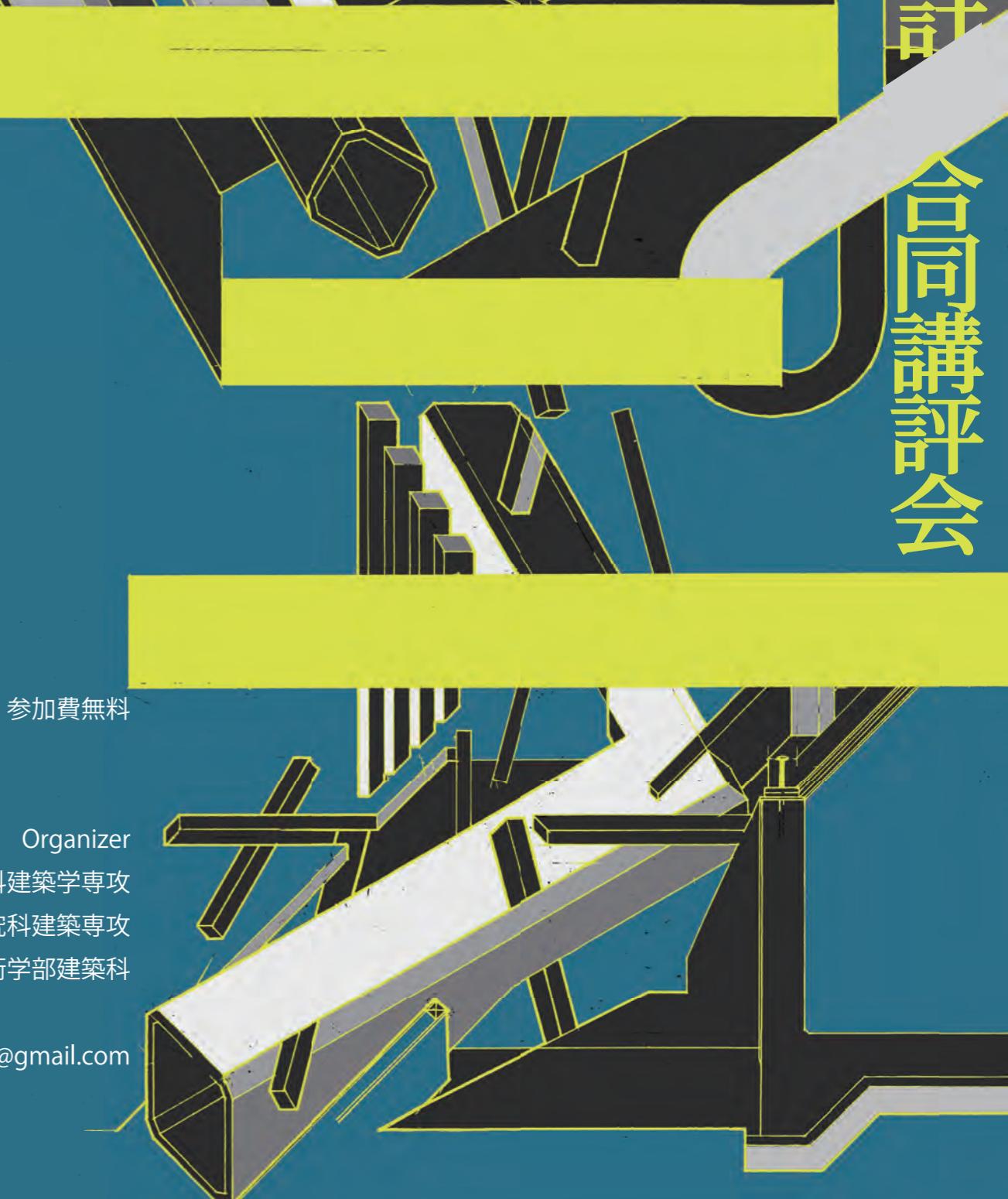
3 Universities Diploma Design Review



参加費無料

Organizer
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
東京工業大学大学院理工研究科建築専攻
東京藝術大学美術学部建築科

diploma.goudou2019@gmail.com



the pop up village トラック一台に積み込める建築群



下田 悠太

近年目覚ましい発展を遂げている折り紙の研究。私はこれを建築スケールに応用する際の幾何学条件を研究し、デジタル空間上で形状操作ができるよう実装した。折り紙建築は伸縮する空間、究極のプレファブ、建築のリユースなど新たな可能性を建築界に示すだろう。さて、今回はトラック一台に積み込める大小さまざまな 21 戸の建築を、被災地を対象に設計した。災害大国日本における被災後のタイムラインに大きな変革がもたらされる。

(しかし、それもまた風景である) views with a lot of views



笠松 咲樹

1694 年、心越禪師により 8 つの漢詩と和歌が詠まれた。1834 年、歌川広重により 8 つの浮世絵が描かれた。1988 年、沖合いは埋め立てられかつての景勝地は姿を変えた。今日わたしは金沢八景の再構成を提案する。

これは、「風景は移ろいゆく」という事実を顕在化させることを通じて、「見立て」という文化の継承がなされている日本における独自の風景の作り方を提案するプロジェクトであり、見立てという手法が持つ、対象物をスケール・距離・機能から自由にすることができる作用について言及する作品である。

三摩耶楼閣



花田 昌

高野山は約二千年前、紀伊山地の奥地に開かれた修験道であった。しかし幾多の変遷を経たのち俗化が進み、世界遺産登録後においては観光の波に飲み込まれてしまっている。高野山が格式高い宗教都市としての確固たる尊厳を持ちながら、観光欲消費のための商品とならないよう、密教的世界観を立体曼荼羅建築として顕在化させる。これは高野山にとっては揺るぎない経済基盤に、観光客・参拝客にとっては真の高野山「らしさ」を体験できる建築となる。

東京藝術大学

Share コトブキ - 横浜コトブキ 50 年計画 横浜開港 200 周年に向けて -

吉行 菜津美



シェアとは何か。ドヤ街と呼ばれる寿町だからこそ考えられるシェアのかたち。この地域の住民の距離感を守りながらも、新たな息吹を吹かせ、地域全体で見守り合う建築をつくる。選択可能性のある 4 つの空間が様々なシェアのかたちを生み出す。時とともにシェアのあり方が移り変わり、街と人々、そしてその人生が、徐々に馴染む。みんな違ってみんないい、お互いに許容しあえる深みのある街となっていく。

東京工業大学

東京大学

銭湯、今を生きる。



竹中 信乃

祖父母は神戸で銭湯を経営していた。その名は五毛温泉。機械で沸かしても「温泉」と付けるのは関西銭湯の特徴だ。私はその「温泉」に毎日入り、育った。他方、減少し続ける銭湯を守るために様々な活用法が模索されている。昭和の遺産としてフューチャーする。高齢者福祉施設の一つとしての利用。銭湯は古き良き昭和時代の化石に過ぎないのであるか。五毛温泉から新しい時代へ、今、そしてこれからを生きる銭湯の形態を模索する。

波止場の終史線



島津 利奈

江戸時代から続く浜離宮、市場の移転後大開発がされようとしている築地、100m 以上のビルが建設中の竹芝、オリンピックの選手村や高層マンションが立ち並ぶ晴海、人々がせわしなく生きる四方に囲まれた中心にある防波堤。周辺から近くで遠い敷地の特徴と生と死の持つ背中合わせの様子、敷地の長さと葬儀・火葬のシークエンス、敷地の持つ時間と敷地に残る建築ではないものを設計のきっかけとして用い、葬儀場・火葬場を設計する。

にじみあう日常



荒川 実緒子

障害者施設と周辺地域は互いに見えない関係であることが多い、また施設では日中活動の社会性や居場所の選択肢が課題となっています。本作品では、台東区の活気を失いつつあるアーケード商店街を敷地とし、互いの活動をかけあわせ、近づけるような場と活動内容を提案します。いわゆる迷惑施設とされてきた場所が中心となって商店街に活力を与え、アーケード下で多様な人々の日常がゆるやかににじみ合う景色を思い描きました。

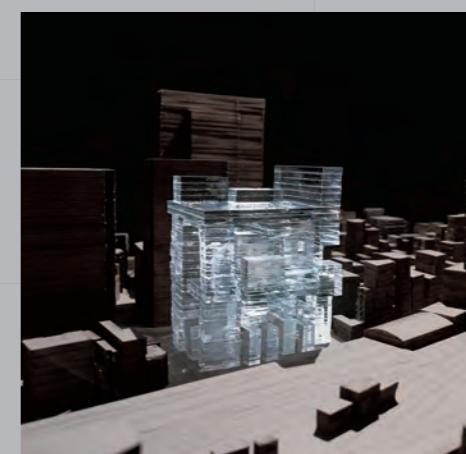
RECLAIMEDLAND ≈ SHIP



田原 花帆

河川と言えば陸に流れるものがイメージとして先行しがちですが「埋立地」と呼ばれるものはどうでしょう? 水辺の上に後から作った陸地が乗つかつていているだけのある意味仮設的な陸と捉えられるのではないかでしょうか。そこで川で分断されていた陸地ではなく、水辺に寄せ集まってできた船のような陸地と敷地を捉えた時新たな水辺と陸のあり方があると考えました。

都市の冗長



小倉 宏志郎

近年盛んに建設される高層複合建築は合理的なビジネスモデルである。しかし人間によって考えられたあらゆる合理性はその知覚の限界によって制限された限定合理性としてしか存在しない。しかし合理性を規定する限界を操作するとどうなるか。建築の過剰、地盤面の過剰、機器設備の過剰、路地空間という間隙の過剰。これらの総体は地球のように不合理かつ不均質だが、冗長性があつてこそ都市は公共的でありうる。これは新たな高層複合建築の提案である。